

〈われ-なんじ〉関係における人間の在り方

マルティン・ブーバーの思想で最も重要な概念は〈われ-なんじ〉と〈われ-それ〉だろう。人間から世界への認識の仕方はこの二つにわけられる。〈われ-なんじ〉とはいわば未知の他者であり、認識できない存在である。〈なんじ〉と接すると、〈われ〉は〈なんじ〉を対象化することになる。それが〈われ-それ〉関係である。しかし、ブーバーは〈なんじ〉を対象化し〈それ〉とすることを「悲しみ」だと表現している。

例えば、素晴らしい小説と出会った時、人は読み終われば「これはこういう小説だ」というように対象化し、様々な解釈の可能性を閉じてしまうだろう。誰かと出会った時、その人のことについて少しずつわかってくると、「あの人はこういう人だ」という固定観念で見ようになるだろう。これらは疑いようのない悲しみである。しかし、〈それ〉は再び〈なんじ〉へと帰ることができる。偏見を捨て、初めて接するかのような態度で〈なんじ〉と出会えば、また新たな感動が生まれるだろう。いわば〈われ-なんじ〉関係とは、可能性への出会いである。

〈なんじ〉を〈それ〉化してしまうことは人間にとって避けられない。何かを認識せずに、〈われ〉は語ることはできない。加えて、〈われ-それ〉関係では、〈われ〉は世界を固定化することになるため、その〈われ〉の認識にとっては、わからないもののない安定した世界となるだろう。しかし、そのような安定は偽りの安定である。人間が人間らしさを取り戻していくには、〈われ-なんじ〉関係に対し全存在をもって追求する姿勢が必要である。

ブーバーの〈われ-なんじ〉・〈われ-それ〉という思想について評価できる点は2つある。1つは、〈なんじ〉が〈われ〉の認識によって〈それ〉へ変容するという点である。一般的な考え方では、最初から真理が存在し、人間は真理を理解するための活動を行っていると考えられているだろう。それとは違い、ブーバーは〈なんじ〉から〈それ〉という順序で世界を捉えている。つまり、人間が理解することとは〈なんじ〉を対象化したものだという事だ。だからこそ、ブーバーの関心はよりよい〈それ〉と出会うことではなく、自己にとって未知の〈なんじ〉と出会うことに関心を寄せていたと考えることができる。

もう1つは、〈なんじ〉〈それ〉という個別的な見方ではなく〈われ-なんじ〉〈われ-それ〉という関係性に着目している点である。〈なんじ〉と出会うことは〈われ〉と出会うことであり、〈それ〉と出会うことは〈われ〉と出会うことである。これは、〈なんじ〉と〈それ〉のどちらと関係性を構築するかによって〈われ〉の在り方が異なるということでもある。〈われ-それ〉関係に膠着すると、〈われ〉は何の変化もしない人間となるだろう。教育、あるいは成長という視点から眺めた時、〈われ-なんじ〉関係という未知の他者と出会うことによって、〈われ〉もまた今までとは異なる〈われ〉自身と出会うことになるだろう。

しかし、ブーバーの論には1つの疑問が浮かび上がる。それは、どのようにすれば〈われ-なんじ〉関係を構築することができるか、という問題である。〈われ〉は、〈なんじ〉を意識することでしか、〈なんじ〉と出会うことはできないのだろうか。おそらく、〈われ-それ〉関係に膠着すると、〈なんじ〉を意識することは困難だろう。そもそも〈なんじ〉を〈それ〉として固定化してしまう〈われ〉はステレオタイプの物的に物事を認識してしまうためである。〈われ-なんじ〉関係をどのように構築するかは、ブーバーの論を越えて、私たち一人ひとりが自分自身の問題として捉え、補完する必要がある。

そのような意味でも、『我と汝・対話』は多くの人に読んでもらいたい本である。この本を読み、ブーバーの理論に触れた時、自分たちがいかに物事を固定化して認識しているかということに自覚的になれる。特に教育にたずさわる者としては読んでおいて後悔のない一冊である。何かを学ぶということは、教わるということではない。未知の他者に対して、もがきながら対話し、未だ知らない自分自身と出会うことである。